



<<連載随想>>クジラ食文化(11) さえずり

(財)日本鯨類研究所顧問・農学博士 大隅 清治

Wikipediaで「さえずり」を調べると、“1) 繁殖期の雄鳥が発する鳴き声、2) 騒々しく喋り立てること、3) 鯨の舌、食用になる。”との記載があり、「さえずり」がクジラの舌を指すことが、一般にも認知されているのが嬉しい。

クジラは鼻道の袋を使って音を発するが、声帯なくて、さらに発声に舌を使わず、喋れない。それにも拘わらず、大きく、重い、クジラの舌を「さえずり」と、軽く、響きの良い言葉で表現している。因みに、日本で昔から食用にしてきた、ニワトリについても、体の各部に昔から多くの名称が付いており、気管を「さえずり」と呼んでいるが、Wikipediaの「さえずり」には、ニワトリの舌について記載がない。

1808年に出版された「鯨史稿」に、既に「さえずり」の言葉が記載され、その特長として、「サカナによりて油多し。水ばかりあるのもあり。‘さやのみ’ともいふ」と記載されている。また、1832年に出版された「鯨肉調味方」にも、「舌のことを‘さや’という。灰色なり。味重し」と記されている。‘さや’は豆の殻、または刀剣類のカバーを言うが、この言葉はクジラの舌の語源としては分からない。

さえずり、つまりクジラの舌、の形は、ヒゲクジラ類とハクジラ類とで違い、ヒゲクジラ類では大きく、楕円形で、平たく、ぶよぶよしているのに対して、ハクジラ類では比較的小さく、先端が尖って、肉厚である。これは両者の食性の違いによって、進化の過程で変化したと考える。舌の体重に対する割合は、クロミンククジラで2.0%であり、成長によって割合は変わりが無いが、マッコウクジラでは、その割合はヒゲクジラ類に比してずっと小さく、成長に伴って、0.39%から0.53%に増加する。

普通、食用としてのさえずりには、ヒゲクジラ類の舌が用いられる。そして、前記の「鯨史稿」にも書かれているように、さえずりには良質の食用油が多く含まれていて、捕鯨母船ではかつては採油原料とされていたが、母船の作業員が暇な時に、ヒゲクジラ類の舌から食用油を採取して一升瓶に詰めて、捕鯨土産として故郷に持ち帰っていた。

さえずりの調理法として、古くは「鯨肉調味方」に、“煎り焼きに良し。野菜取り合わせ、すましに良し。熱湯ひき、三杯酢にて良し。塩にしたるを、薄く切りて、水に晒し、塩を出して用いる也”と書かれている。

さえずりを煎って油を取ってから、乾燥させたものが「さいかす」であり、それを水に2、3日漬けたものを「さいころ」といって、味噌汁やおでんに入れて食べる。

大阪の「徳家」さんは、古くからさえずりを上手に料理に使っている。女将の大西睦子さんが1995年に出版した『徳家秘伝 鯨料理の本』では、さえずりの料理について多くの記載がある。そこから引用させて頂くと、「舌の根元と先端部では味も歯ごたえも違う。

ハリハリ鍋にさえずりを入れると、一段と味が良くなる。さえずり煮は、下ごしらえをしたさえずりを5mmの厚さに切る。鍋に出し汁をひと煮立ちさせ、薄口醤油、味醂、を加えて30分ほど煮込み、水溶き片栗粉でとろみを付ける。水菜を茹で、溶き辛子を添えて頂く。また、生さえずりは、皮を剥き、根元の赤い肉をそぎ取る。白い部分2cm角の棒状に切り、冷蔵庫でシャーベット状になるまで凍らせ、冷蔵庫から取り出して、サイコロ状に切り分ける。器に盛り、梅肉だれ、味噌だれ、またはショウガだれをかけて、食べる。生さえずりはシャーベット状に凍らせたのが美味しく、口の中でとろける感触を楽しむ。

さえずりの食材には、原料を乾燥させたものもある」などの記述が、写真とともに紹介されている。

最近では、多くの鯨料理店でさえずりを食材として好んで使い、需要が多く、供給が間に合わないとのことである。



【巻頭言】「嘘で固められた反捕鯨の主張」

 NPO法人クジラ食文化を守る会
 理事 日野 浩二


嘘も百回繰り返すと、本当に聞こえる。これはナチスドイツの宣伝相ゲッペルスが言った有名な言葉です。アメリカが商業捕鯨のモラトリアムを完成させたのは、またグリーンピースが、環境保護と動物愛護をごちゃ混ぜにしたパフォーマンスで大金持ちになったのは、ゲッペルスの百回の嘘を利用したからです。要は、何回も繰り返して人の脳に刷り込むことにあります。私は、反捕鯨活動家を撃退するには、皆がこの嘘を十分に知り得て、それは嘘だと発信することが極めて重要と考え、私の知り得た『モラトリアムの嘘』、『環境保護』を口にする活動家の嘘を以下に述べます。

1945年大戦が終わると、マーガリンの原料の鯨油を求めて欧米各国は一斉に南氷洋捕鯨に出漁した。1948年にはIWCが生まれた。ところが、15年も経つと、農業は殺虫剤や化学肥料のおかげで豊作が続き、植物油が鯨油より遥かに安くなって鯨油はもはや不要となり、欧米の歴史ある捕鯨は終焉を迎えようとしていました。しかし、ソ連は精密機械油を抹香鯨の脳油から作って人工衛星を飛ばしていたので、毎年2000頭の抹香捕鯨を続けていた。また当時は、世界中で重化学工業が発展し、その結果各地で酸性雨が降り森林が枯死する事件が続発して、大きな社会問題となっていた。また世界では、女性が美しい野生動物の毛皮のコートで着飾る事が流行し、毛皮が飛ぶように売れて、希少な動物の乱獲が憂慮された時代でした。このような時に、アメリカにグリーンピースと称する一団が登場したのです。

エスキモーが毛皮を採るために可愛らしいゴマフアザラシの赤ちゃんを惨殺する残酷なやらせのシーンの映画を作り、数年の間、毎日夕食時間帯に全米で放送しました。そして、「アザラシを救え！その為に皆さんの募金を」と訴えて大金を集めました。グリーンピースの創始者一族が大金持ちにランクされた程です。グリーンピースは、『環境保護と動物愛護を餌にした集金マシーンである。』という人も出てきました。「アザラシを救え」の大合唱はついに政府を動かして「アザラシを脅したり殺す者は処罰する」というアザラシ法が生まれました。江戸時代のお犬様の法律によく似ています。

1963年以降ベトナム戦争に参入したアメリカ軍は、枯葉剤を空中から散布して、米国民を始め多くの人から非難を浴びました。ソ連がこれを見逃す筈はありません。国連で「アメリカは地球の環境を破壊する国家である」と決議する法案を準備しました。このことを察知したアメリカは先手をとって、1972年国連人間環境会議で「アメリカは鯨モラトリアムを宣言する。滅びゆく鯨を護る事は、地球の環境を護る事である」と素早くモラトリアムを可決してしまったので、ソ連は準備した法案を出す機会がなくなったのです。実に見事な作戦勝ちであります。

アメリカ政府は、直ちにグリーンピースと手を結びました。グリーンピースは、国会議員に手紙を送付しました。「もし、あなたが捕鯨賛成を少しでも言えば、あなたを環境破壊主義者と認定して、次の選挙で落選させる」と。国会議員は、皆、反捕鯨を唱えたので、世論は急速に反捕鯨に傾斜していったのです。「反捕鯨で地球の環境を護れ」「動物の資源を絶滅から救え」のスローガンを繰り返して主張したアメリカは、ついに10年後の1982年IWCでモラトリアムを完成させました。これがモラトリアムの真相です。『鯨は絶滅に瀕している』『反捕鯨で地球の環境を護れ』『鯨を殺すのは可哀そうだ』そのような事を主張してパフォーマンスをして、募金すれば金が集まり商売になる。こんな思いの環境保護団体がアメリカ、オセアニアに出現しています。日本の鯨の食文化を守り、捕鯨再開を願う私たちはそんな彼らと戦っているのです。

アメリカの地方に生息していたアザラシ180万頭のうち、18万頭を捕って生活をしていたイヌイットが、猟を辞めさせられた結果、現在アザラシは600万頭に増え、州政府が予算を組んで、30万頭を必死で駆除していますが、30万頭はとても無理、そのように聞いております。「鯨を殺すな」「可哀そうだ」「今の捕鯨のやり方は非人道」「アニマルウェルフェアの精神がない」と主張するオーストラリアは、実は毎年10万頭のラクダをヘリコプターの機銃で射殺しているようです。また、何十万頭のカンガルーも殺しています。「アニマルウェルフェア」「非人道」は言う資格がないと思います。ニュージーランドでも、世界には少ないフォッツサム(有袋類のうさぎ)を撲殺し、平気で車でひき殺しています。

動物愛護と、地球環境を護る事は、元来まったく次元が異なります。モラトリアムや環境保護と称する彼らの主張は、屁理屈が多いのです。この屁理屈を攻め続ける事、日本の政府やマスコミも絶えずこのことを指摘し続ける事が大切だと思います。ゲッペルスは、その言葉の裏を返せば、本当は嘘に騙されるなど言っている様です。

I 調査目的を7年ぶりに完遂
～新南極海調査終了、船団帰国～

新しい南極海での調査が無事終了し、調査船団（母船1、目視採集船2、目視専門船1、調査員・乗組員合計160人）が去る24日、山口県・下関市他に入港した。今回の調査で特筆されることは従来の調査と内容を変更した新しい調査（NEWREP-A）の初年度であったこと、シー・シェパードの妨害に遭わなかったことの2点。入港式には中尾友昭・下関市長、本川一善・農水事務次官らが出席し、調査員たちの労をねぎらった。

調査団長の松岡耕二さん（日本鯨類研究所・調査研究部次長）は、入港式で次のように挨拶した。

「シー・シェパードの船と遭遇することなく、所期の目的を果たすことができ安心している。今回はNEWREP-Aの初年度で非常に重要な調査だっただけに調査員、乗組員ともほっとしている。」

シー・シェパードの妨害に遭わなかったため、7年ぶりに調査計画を完遂することができたが、シー・シェパードは完全に妨害を断念したとの声明は出していない。



平成27年度 新南極海鯨類科学調査船団 入港式

(1) 何が目的だったのか

わが国は、1987年に商業捕鯨が禁止になった時から南極海での調査捕鯨を開始した。1987年～2005年までを第I期、2006年から第II期の調査を続けてきたが、2012年に豪州が国際司法裁判所にわが国の調査は純粋な科学調査ではないとして提訴した。2014年3月にわが国は敗訴したため、従来の調査内容を改めて「新南極海鯨類科学調査計画（NEWREP-A）」を策定、IWC科学委員会の審査を経て、2015年12月から着手した。

新しい調査の目的は次の2点。

- ①改定管理方式（鯨を減らさずに利用し続けるための捕獲量の算出方法）を適用したクロミンク鯨の捕獲枠算出するために、高精度の生物学的、生態学的情報を入手する（例：妊娠率、自然死亡率、性成熟年齢など）
- ②生態系モデルの構築を通じた南極海生態系の構造および動態を調べるエサの生物の変動や鯨種間の生存競争の動きなど

(2) 判ったこと、調べたこと

- ①雄は83.5%、雌は75.7%が性成熟 捕獲したクロミンククジラ333頭のうち、雄は103頭、雌は230頭。その性成熟は上記のとおり高かった。また雌の妊娠率は90.2%で、捕獲した雌クジラのほとんどが妊娠していた。このことから南極海クロミンククジラの繁殖状況が健全であることが判明。



【採集された生殖腺卵巣と黄体】

②ザトウとミンクが棲みわけ

捕獲したクロミンクミンククジラだけだったが、目視で多くのクジラを発見した。クロミンククジラに次いで多かったのはザトウクジラで1452頭。この鯨種の資源量が毎年増えていることを証明した。

ザトウは沖合域に、ミンクは氷縁周辺とロス海で多く発見され、両クジラが棲み分けしていることが明らかに。

- ③今回の調査の新しい試みとして、クジラを殺さずにふたつの作業をした。ひとつは、DNAを解析するためにミンククジラの表皮の一部を採取し、回遊経路を把握するための衛星標識装置実験を実施しデータを蓄積した。



【CTDによる海洋観察】

- ④捕獲対象外の鯨種であるシロナガス、ナガス、ザトウ、ミナミセミ、シャチからもDNA解析のための表皮の一部を標本として採取した。またこれからの鯨種の外見上の特色により個体識別ができるよう撮影もした。

⑤新たに試みとして、鯨のエサ生物であるオキアミの資源量把握のため

計量科学魚類探知機による観測としてネットサンプリングを実施した。あわせて水温、塩分濃度、水質などを調べ、オキアミの生息環境に関するデータを集めた。



【餌生物調査・ナンキョクオキアミ】



【胃の内容物】



【餌生物調査ネットサンプリング】



【バイオプシー採集機器】

II シー・シェパード妨害失敗
～オーストラリア政府が協力せず～

昨年末～今年3月に実施された新南極海調査（NEWREP-A）が成功したのは、シー・シェパード(SS)の妨害がなかったからだが、SSは妨害を断念したわけではない。SSのウェブサイトによると、SSはステープ・アーウィン号を1月18日に豪州のフリーマントルから出航させている。だが、日本の調査船団を発見できなかった。SSは豪州政府に日本船団の位置情報を提供しようとしたが、豪州はこれに応じなかった。

豪州政府は日本の調査には表面上は強く反対しているが、今回はSSに協力しなかった。以前の労働党と違い現在の自由党政権は日本との関係改善につとめ、日本の潜水艦技術の供給など安全保障分野での接近もみられる。

SSは今後、日本の調査妨害を停止するだろうか。それはあり得ない。第1に新しい鋼鉄製の船を建造し、今年9月に就航させる予定だ。その資金はオランダの宝くじ主催団体からの寄付（約11億円）によって充てられている。

第2にSSにとって南極海での日本への妨害行為は最大の資金調達源である。妨害船には撮影クルー数人が乗り組んでおり、妨害活動は全世界のTVに連日送られている。SSは妨害を終えたあと、豪州、ニュージーランドなどで反捕鯨集会を開き、そこで多くの寄付金を集めている。

SSは今後妨害活動を止めることはあり得ない。それを成功させないためには、豪州、ニュージーランド政府に、日本船団の調査位置に関する情報をSSに提供しないよう、外交上から要望し続けることだ。SSの行為は明らかに違法である。日本鯨類研究所が米国の裁判所で起こしている提訴で、SSの代表者P・ワトソンは有罪となり、SSの行動には反差し止め命令が出されている。不法行為を国際社会がいつまでも容認することはあり得ない。わが国はねばり強く国際世論に調査捕鯨の正当性を訴えるべきだ。国際司法裁判所は、日本の調査捕鯨は国際捕鯨取締条約に規定された加盟国の権利として認めているのである。



III Behind “THE COVE” 各地で上映
～捕鯨の真実を描いたドキュメンタリー映画～

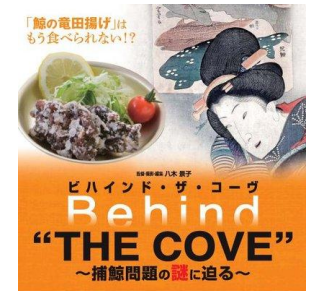
2010年に製作され、アカデミー記録映画賞を受賞したTHE COVEは日本の捕鯨業が倫理に反し、それに携わる人々を“悪人”と糾弾した反捕鯨映画だった。これに反証する形で製作された八木景子さんのBehind “THE COVE”～捕鯨問題の謎に迫る～は“初めに結論ありき”ではなく、日本の捕鯨の実情を関係者へのインタビューと客観的な事実だけでまとめている。

インタビューに登場するのは、反捕鯨団体のリーダー、THE COVEの主賓者、監督、それに和歌山県・太地町関係者や日本の歴代IWC代表者などである。これらの人たちの証言で明らかにされた事実は、多くの日本人が知らない点がある。他に産業の成り立たない太地にとっては、イルカ、クジラ漁は町民たちの天職であり生活文化であった。日本の捕鯨は条約の下で正当に行われている。反捕鯨国はIWCでルール、条約違反を何度となく繰り返している。これほど筋の通った捕鯨業を潰そうとする反捕鯨国の真の意図は何なのか。映画はそこまで突っ込んでストーリーを進めている。

昨年夏に完成したこの映画は、9月上旬、カナダのモントリオール映画祭に出品され、THE COVEとは全く異なる面を描いたことで話題となった。今年になって日本でも一般公開され、3月の東京を皮切りに、沖縄、大阪、京都、名古屋で上映され、来る5月28日から再び東京（下高井戸シネマ）で上映される予定。

八木監督はこの映画を作った背景を次のように述べている。

「国際司法裁判所の判決がきっかけになった。このまま放置しておく、日本人は鯨肉を放棄せざるを得ない立場に追い込まれる。日本と日本人をクジラの殺し屋と決めつけたTHE COVEには反論すべきだ。そんな気持ちで撮影を始めたが、取材を重ねるたびに、THE COVEの主張が誤りや大げさであること、日本人の食生活を向上させるために、懸命に頑張った人たちが外国人から悪人呼ばわりされるのは許しがたいことだった」（「正論」2015/12月号）



「NPO法人クジラ食文化を守る会」会長で、東京農業大学名誉教授の小泉武夫先生が現代人こそ食べたほうがいい、注目のたべもの案内書として河出書房新書より『江戸の健康食』を刊行しました。内容は、江戸の人たちは、健康でいるための“知恵の食事学”を考え実践していた。その背景には、5つの法則があったと思われる。例えば、巨大な生き物に挑んだ先人たちは、鯨は毒がなく、人の体にもよく美味しいもの、鯨は究極の食材であり、優れた薬。（三の膳＝海の幸の満悦）また、一の膳＝発酵食の精華のなかの「甘酒」は夏バテ防ぎ、栄養豊富であり体力回復に効果的な「滋養強壮ドリンク剤」としているなどなど。現在、時代劇小説がブームですが、江戸時代の食事・健康にも一度目を向けてみは！